

芥川龍之介

或阿呆の一生



或阿呆の一生

僕はこの原稿を発表する可否は勿論、発表する時や機関も君に一任したいと思っっている。

君はこの原稿の中に出て来る大抵の人物を知っているだろう。しかし僕は発表するとしても、インデキスをつけずに貰いたいと思っっている。

僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしている。しかし不思議にも後悔していない。唯僕の如き悪夫、悪子、悪親を持ったものたちを如何にも気の毒に感じている。ではさようなら。僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己弁護をしなかつたつもりだ。

最後に僕のこの原稿を特に君に托するのは君の恐らくは誰よりも僕を知っていると思うからだ。（都会人と云う僕の皮を剥ぎさえすれば）どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑ってくれ給え。

昭和二年六月二十日

芥川龍之介

久米正雄君

一時代

それは或本屋の二階だった。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子はしごに登り、新らしい本を探していた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨウ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背せ文字もじを読みつづけた。そこに並んでいるのは本とい

うよりも寧ろ世紀末それ自身だった。ニイチエ、ヴェル
レエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプト
マン、フロオベエル、……

彼は薄暗がりと戦いながら、彼等の名前を数えて行つ
た。が、本はおのずからもの憂い影の中に沈みはじめた。
彼はとうとう根気も盡き、西洋風の梯子を下りようとし
た。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の頭ちようどの上に突然
ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇たたずんだまま、
本の間みおろに動いている店員や客を見下した。彼等は妙に小
さかった。のみならず如何いかにも見すばらしかった。

「人生は一行のボオドレエルにも若しかない。」
彼は暫く梯子の上からこう云う彼等を見渡して
いた。……

二 母

狂人たちは皆同じように鼠ねずみいろ色の着物を着せられていた。広い部屋はその為に一層憂鬱に見えるらしかった。彼等の一人はオルガンに向い、熱心に讚美歌を弾きつづけていた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立

ち、踊ると云うよりも跳ねまわっていた。

彼は血色けっしょくの善いい医者と一しよにこう云う光景を眺めていた。彼の母も十年前には少しも彼等と変らなかつた。少しも、——彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。

「じゃ行こうか？」

医者は彼の先に立ちながら、廊下伝いに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコオルを満した、大きい硝子ガラスの壺の中に脳髓のうずいが幾つも漬つかっていた。彼は或脳髓の上にかすかに白いものを発見した。それは丁度卵しろみの白味をち

よつと滴らしたのに近いものだった。彼は医者と立ち話をしながら、もう一度彼の母を思い出した。

「この脳髓を持っていた男は××電燈会社の技師だったがね。いつも自分を黒光りのする、大きいダイナモだと思っていたよ。」

彼は医者 of 目を避ける為に硝子窓の外を眺めていた。そこには空き罎あびんの破片を植えた煉瓦塀れんがべいの外に何もなかった。しかしそれは薄い苔こけをまだらにぼんやりと白しらませていた。

三家

彼は或郊外の二階の部屋に寝起きしていた。それは地盤の緩ゆるい為ゆに妙に傾いた二階だった。

彼の伯母おばはこの二階に度たび彼と喧嘩をした。それは彼の養父母の仲裁を受けることもないことはなかった。しかし彼は彼の伯母に誰よりも愛を感じていた。一生独身だった彼の伯母はもう彼の二十歳の時にも六十に近い年よりだった。

彼は或郊外の二階に何度も互に愛し合うものは苦しめ合うのかを考えたりした。その間あいだも何か気味の悪い二階の傾きを感じながら。

四 東 京

隅田川すみだがわはどんより曇っていた。彼は走っている小蒸気こじょうきの窓から向う島の桜を眺めていた。花を盛った桜は彼の目には一列の檻樓ぼろのように憂鬱だった。が、彼はその桜に、——江戸えど以来の向う島の桜にいつか彼自身を見出し

ていた。

五 我

彼は彼の先輩と一しよに或カッフエの卓子テエブルに向い、絶えず巻煙草をふかしていた。彼は余り口をきかなかつた。が、彼の先輩の言葉には熱心に耳を傾けていた。

「きようは半日自動車に乗っていた。」

「何か用があつたのですか？」

彼の先輩は頬杖ほおづえをしたまま、極めて無造作むぞうさに返事をし

た。

「何、唯乗っていたかっただから。」

その言葉は彼の知らない世界へ、——神々に近い「我」^がの世界へ彼自身を解放した。彼は何か痛みを感じた。が、同時に又^{よろこび} 歡^びも感じた。

そのカツフエは極小さかった。しかしパンの神の額^{がく}の下^{した}には赭^{あか}い鉢に植えたゴムの樹が一本、肉の厚い葉をだらりと垂らしていた。

六 病

彼は絶え間ない潮風の中に大きい英吉利語の辞書をひろげ、指先に言葉を探していた。

Talaria 翼の生えた靴、或はサンダル。

Tale 話。

Talipot ひがしインド 東印度に産する椰子やし。幹は五十呎フィートより百

フィート 呎の高さに至り、葉は傘、扇、帽等に用いらる。七十年に一度花を開く。……

彼の想像ははつきりとその椰子の花を描き出した。すると彼は喉もとに今までに知らない痒さを感じ、思わず辞書の上へ啖たんを落した。啖を？——しかしそれは啖ではなかった。彼は短い命を思い、もう一度この椰子の花を想像した。この遠い海の向うに高だかと聳えている椰子の花を。

七画

彼は突然、——それは実際突然だった。彼は或本屋の

店先に立ち、ゴオグの画集を見ているうちに突然画と云うものを了解した。勿論そのゴオグの画集は写真版だったのに違いなかった。が、彼は写真版の中にも鮮あざやかに浮かび上る自然を感じた。

この画に対する情熱は彼の視野しやを新たにした。彼はいつか木の枝のうねりや女の頬の膨ふくらみに絶え間ない注意を配り出した。

或雨を持った秋の日の暮、彼は或郊外のガードの下を通りかかった。

ガードの向うの土手の下には荷馬車が一台止まってい

た。彼はそこを通りながら、誰か前にこの道を通ったものののあるのを感じ出した。誰か？——それは彼自身に今更問いかける必要もなかった。二十三歳の彼の心の中には耳を切った和蘭人オランダが一人、長いパイプを啣くわえたまま、この憂鬱な風景画の上へじつと鋭い目を注いでいた。……

八 火 花

彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行っ

た。雨は可也かなり烈しかった。彼は水沫しぶきの満ちた中にゴム引の外套においの匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を発していた。彼は妙に感動した。彼の上着うわぎのポケットは彼等の同人雑誌へ発表する彼の原稿を隠していた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相変あいかわらず鋭い火花を放っていた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかった。が、この紫色の火花だけは、——すき凄まじい空中の火花だけは命と取り換えてもつかまえたかった。

九 死 体

死体は皆親指に針金のついた札をぶら下げていた。その又札は名前だの年齢だのを記しるしていた。彼の友だちは腰をかがめ、器用にメスを動かしながら、或死体の顔の皮を剥はぎはじめた。皮の下に広がっているのは美しい黄いろの脂肪だった。

彼はその死体を眺めていた。それは彼には或短篇を、
——王おうちよう朝時代に背景を求めた或短篇を仕上げる為に必

要だったのに違いなかった。が、腐敗した杏あんずの匂に近い死体の臭気は不快だった。彼の友だちは眉間みけんをひそめ、静かにメスを動かして行った。

「この頃は死体も不足してね。」

彼の友だちはこう言っていた。すると彼はいつの間にか彼の答を用意していた。——「己おれは死体に不足すれば、何の悪意もなしに人殺しをするがね。」しかし勿論彼の答は心の中にあっただけだった。

十先生

彼は大きい櫨かしの木の下に先生の本を読んでいた。櫨の木は秋の日の光の中に一枚の葉さえ動さなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤はかりが一つ、丁度平衡を保っている。——彼は先生の本を読みながら、こう云う光景を感じていた。……

十一 夜明け

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に広い市場いちばを見渡していた。市場に群つた人々や車はいずれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の巻煙草に火をつけ、静かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えほえかかった。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さえ愛していた。

市場のまん中には篠懸すずかけが一本、四方へ枝をひろげている。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の真上まうえに星が一つ輝いていた。

それは彼の二十五の年、——先生に会った三月目だった。

十二軍港

潜航艇の内部は薄暗かった。彼は前後左右を蔽おおった機械の中に腰をかがめ、小さい目金めがねを覗のぞいていた。その又

目金に映っているのは明るい軍港の風景だった。

「あすここに『金剛』こんごうも見えるでしょう。」

或海軍将校はこう彼に話しかけたりした。彼は四角いレンズの上に小さい軍艦を眺めながら、なぜかふと阿蘭陀芹^{オランダゼリ}を思い出した。一人前三十銭のビイフ・ステエクの上にもかすかに匂っている阿蘭陀芹を。

十三 先生の死

彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラットフ

オオムを歩いていった。空はまだ薄暗かった。プラットフォオオムの向うには鉄道工夫が三四人、一斉にいっせい鶴嘴つるはしを上下させながら、何か高い声にうたっていた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎった。彼は巻煙草に火もつけずによろこ歡びこに近い苦しみを感じていった。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が一列、薄い煙を靡なびかせながら、うねるようにこちらへ近づきはじめた。

十四 結婚

彼は結婚した翌日に「来^き匆^{そう}々^{そう}無駄費^{むだばい}いをしては困^こる」
と彼の妻に小言^{こご}を言^いった。しかしそれは彼の小言^{こご}よりも
彼の伯母^{おば}の「言^いえ」と云^いう小言^{こご}だった。彼の妻は彼自身
には勿論、彼の伯母にも詫^わびを言^いっていた。彼の為^{ため}に買
つて来^きた黄水^{きずい}仙^{せん}の鉢^{はち}を前^{まへ}にしたま^まま。……

十五 彼等

彼等は平和に生活した。大きい芭蕉ばしやうの葉の広がったか
げに。——彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間
かかる或海岸の町にあつたから。

十六 枕

彼は薔薇ばらの葉の匂のする懷疑主義を枕まくらにしなが、ア

ナトオル・フランスの本を読んでいた。が、いつかその枕の中にも半身半馬神のいることには気づかなかつた。

十七 蝶

藻もの匂の満ちた風の中に蝶が一羽ひらめいていた。彼はほんの一瞬間、乾いた彼の唇の上へこの蝶の翅つばさの触れるのを感じた。が、彼の唇の上へいつか捺なすって行った翅の粉だけは数年後にもまだきらめいていた。

十八 月

彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇した。彼女の顔はこう云う昼にも月の光りの中にいるようだった。彼は彼女を見送りながら、（彼等は一面識もない間がらだった。）今まで知らなかった寂しさを感じた。……

十九 人工の翼

彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲学者たちに移って行った。が、ルツソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面、——情熱に駆^{から}られ易い一面のルツソオに近い為かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面、——冷^{ひやや}かな理智に富んだ一面に近い「カンデイイド」の哲学者に近づいて行った。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくはなかつ

た。が、ヴオルテエルはこう云う彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ、易やすやすと空へ舞い上あがった。同時に又理智の光を浴びた人生の歓びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すばらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮さへぎるもののない空中をまっ直に太陽へ登って行つた。丁度こう云う人工の翼を太陽の光りに焼かれた為にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人ギリシアも忘れたように……

二十
械かせ

彼等夫妻は彼の養父母と一つ家に住むことになった。それは彼が或新聞社に入社することになった為だった。彼は黄いろい紙に書いた一枚の契約書を力にしていた。が、その契約書は後のちになって見ると、新聞社は何の義務も負わずに彼ばかり義務を負うものだった。

二十一 狂人の娘

二台の人力車は人気ひとけのない曇天の田舎道を走って行った。その道の海に向っていることは潮風しおかぜの来るのでも明らかだった。後あとの人力車に乗っていた彼は少しもこのラ
ンデ・ブウに興味のないことを怪みながら、彼自身をこ
こへ導いたものの何であるかを考えていた。それは決して恋愛ではなかった。若し恋愛でないとすれば、——彼
はこの答を避ける為に「兎に角我等は対等だ」と考えな

い訣わけには行ゆかなかつた。

前の人力車に乗っているのは或狂人の娘だった。のみならず彼女の妹は嫉妬しつとの為に自殺していた。

「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、——動物的本能ばかり強い彼女に或憎悪ぞうおを感じていた。

二台の人力車はその間あいだに磯臭い墓地の外へ通りかか
った。蠣殻かきがらのついた粗朶垣そだがきの中には石塔せきとうが幾つも黒んで
いた。彼はそれ等の石塔の向うにかすかにかがやいた海
を眺め、何か急に彼女の夫を——彼女の心を捉とらえていな

い彼女の夫を軽蔑し出した。……

二十二 或画家

それは或雑誌の挿し画だった。が、一羽の雄おんどり鶏の墨画は著しい個性を示していた。彼は或友だちにこの画家のことを尋ねたりした。

一週間ばかりたった後、この画家は彼を訪問した。それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だった。彼はこの画家の中に誰も知らない詩を発見した。のみならず彼

自身も知らずにいた彼の魂を発見した。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍からきびに忽ちこの画家を思い出した。丈たけの高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神経のように細ぼそと根を露あらはしていた。それは又勿論傷きずき易い彼の自画像にも違いなかった。しかしこう云う発見は彼を憂鬱にするだけだった。

「もう遅い。しかしいざとなった時には……」

二十三 彼女

或広場の前は暮れかかっていた。彼はやや熱のある体にこの広場を歩いて行った。大きいビルディングは幾棟もかすかに銀色に澄んだ空に、窓々の電燈をきらめかせていた。

彼は道ばたに足を止め、彼女の来るのを待つことにした。五分ばかりたった後、^{のち}彼女は何かやつれたように彼の方へ歩み寄った。が、彼の顔を見ると、「疲れたわ」

と言つて頬笑ほほえんだりした。彼等は肩を並べながら、薄明い広場を歩いて行つた。それは彼等には始めてだつた。彼は彼女と一しよにいる為には何を捨てても善い気もちだつた。

彼等の自動車に乗つた後、彼女はじつと彼の顔を見つめ、「あなたは後悔なさらない？」と言つた。彼はきつぱり「後悔しない」と答えた。彼女は彼の手を抑え、「あたしは後悔しないけれども」と言つた。彼女の顔はこう云う時にも月の光の中にいるようだつた。

二十四 出 産

彼は襖側ふすまぎわに佇たたずんだまま、白い手術着を着た産婆が一人、赤児を洗うのを見下していた。赤児は石鹼せっけんの目にしみる度にいじらしい顰しかめ顔を繰り返した。のみならず高い声に啼なきつづけた。彼は何か鼠の仔こに近い赤児の匂を感じながら、しみじみこう思わずにはいられなかった。

——「何の為にこいつも生まれて来たのだろう？ この娑婆しやば苦くの充ち満ちた世界へ。——何の為に又こいつも己おれ

のようなものを父にする運命を荷つたのだらう？」

しかもそれは彼の妻が最初に出産した男の子だった。

二十五 ストリントベリイ

彼は部屋の戸口に立ち、ざくろ柘榴の花のさいいた月明りの中に薄汚い支那人が何人か、マアジヤン麻雀戯マアジヤンをしているのを眺めていた。それから部屋の中へひき返すと、背の低いランプの下に「痴人ちじんの告白」を読みはじめた。が、二頁も読まないうちについてか苦笑を洩らしていた。——ストリント

ベリイも亦情人だった伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない謔うそを書いている。……

二十六 古代

彩色さいしきの剥はげた仏たちや天人や馬や蓮はすの華はなは殆ど彼を压倒した。彼はそれ等を見上げたまま、あらゆることを忘れていた。狂人の娘の手を脱した彼自身の幸運さえ。……

二十七 スパルタ式訓練

彼は彼の友だちと或裏町を歩いてきた。そこへ幌ほろをか
けた人力車が一台、まっ直に向うから近づゆうべいて来た。し
かもその上に乗っているのは意外にも昨夜ゆうべの彼女だっ
た。彼女の顔はこう云う昼にも月の光の中かわにいるようだ
った。彼等は彼の友だちの手前、勿論挨拶かわさえ交さなか
った。

「美人ですね。」

彼の友だちはこんなことを言った。彼は往来の突き当りにある春の山を眺めたまま、少しもためらわずに返事をした。

「ええ、中々美人ですね。」

二十八 殺人

田舎道は日の光りの中に牛の糞ふんの臭気を漂ひらわせていた。彼は汗を拭いながら、爪つま先まさき上りの道を登って行った。道の両側に熟した麦は香ばしい匂を放っていた。

「殺せ、殺せ。……」

彼はいつか口の中にこう云う言葉を繰り返していた。

誰を？——それは彼には明らかだった。彼は如何にも卑屈らしい五分刈ごぶがりの男を思い出していた。

すると黄ばんだ麦の向うに羅馬カトリック教の伽藍がらんが一字、いつの間にか円屋根を現し出した。……

二十九 形

それは鉄の銚子ちょうしだった。彼はこの糸目のついた銚子に

いつか「形」の美を教えられていた。

三十 雨

彼は大きいベッドの上に彼女といろいろの話をしていた。寝室の窓の外は雨ふりだった。浜木棉はまゆうの花はこの雨の中あいかわらずにいつか腐って行くらしかった。彼女の顔は不相変月の光の中あいかわらずにいるようだった。が、彼女と話していることは彼には退屈でないこともなかった。彼は腹這いになつたまま、静かに一本の巻煙草に火をつけ、彼女と一し

よに日を暮らすのも七年になっ
ていることを思い出した。

「おれはこの女を愛している
だろうか？」

彼は彼自身にこう質問した。
この答は彼自身を見守り
つけた彼自身にも意外だった。

「おれは未だに愛している。」

三十一 大地震

それはどこか熟し切った杏あんずの匂に近いものだった。

彼は焼けあとを歩きながら、かすかにこの匂を感じ、炎天に腐った死骸の匂も存外悪くないと思ったりした。が、死骸の重なり重った池の前に立って見ると、「酸鼻さんび」と云う言葉も感覚的に決して誇張でないことを発見した。殊に彼を動かしたのは十二三歳の子供の死骸だった。彼はこの死骸を眺め、何か羨ましさに近いものを感じた。

「神々に愛せらるるものは夭折ようせつす」——こう云う言葉なども思い出した。彼の姉や異母弟はいずれも家を焼かれていた。しかし彼の姉の夫は偽証罪を犯した為に執行猶予中の体だった。……

「誰も彼も死んでしまえば善い。」

彼は焼け跡に佇たたずんだまま、しみじみこう思わずには
いられなかった。

三十二 喧嘩

彼は彼の異母弟と取り組み合いの喧嘩をした。彼の弟は彼の為に圧迫を受け易いのに違いなかった。同時に又彼も彼の弟の為に自由を失っているのに違いなかった。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣ならえ」と言いつづけていた。

しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだった。彼等は取り組み合ったまま、とうとう縁先へ転げて行つた。縁先の庭には百日紅がさるすべり一本、——彼は未だに覚えてゐる。——雨を持った空の下に赤光りに花を盛り上げていた。

三十三 英雄

彼はヴォルテエルの家の窓からいつか高い山を見上げていた。ひょうが氷河の懸つた山の上にははげたか秃鷹の影さえ見えなかつた。

った。が、背の低い露西亞ロシア人が一人、執拗しつように山道を登りつづけていた。

ヴォルテエルの家も夜になった後、彼は明るいうらなの下にこう云う傾向詩を書いたりした。あの山道を登って行った露西亞人の姿を思い出しながら。……

——誰よりも十戒じっかいを守った君は
誰よりも十戒を破った君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を軽蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上った君は
誰よりも現実を知っていた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
くさばな草花の匂のする電気機関車だ。——

三十四 色彩

三十歳の彼はいつの間まか或空き地を愛していた。そこ

には唯苔こけの生えた上に煉瓦や瓦の欠片かけらなどが幾つも散ら
かっているだけだった。が、それは彼の目にはセザンヌ
の風景画と変りはなかった。

彼はふと七八年前まえの彼の情熱を思い出した。同時に又
彼の七八年前には色彩を知らなかったのを発見した。

三十五 道化人形

彼はいつ死んでも悔いないように烈しい生活をするつ
もりだった。が、不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活

をつづけていた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形どうけにんぎようの立っているのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云うことを考えたりした。が、意識の外の彼自身は、——言わば第二の彼自身はとうにこう云う心もちを或短篇の中に盛りこんでいた。

三十六 倦怠

彼は或大学生と芒原すすきはらの中を歩いていた。

「君たちはまだ生活慾を盛に持っているだろうね？」

「ええ、——だってあなたでも……」

「ところが僕は持っていないんだよ。制作慾だけは持っているけれども。」

それは彼の真情だった。彼は實際いつの間にか生活まに興味を失っていた。

「制作慾もやっぱり生活慾でしょう。」

彼は何とも答えなかった。芒原はいつか赤い穂の上にはつきりと噴火山を露し出した。彼はこの噴火山に何か羨望に近いものを感じた。しかしそれは彼自身にもなぜ

と云うことはわからなかった。……

三十七 越し人

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍った、かがやかしい雪を落すように切ない心もちのするものだった。

風に舞ひたるすげ笠の

何かは道に落ちざらん

わが名はいかで惜しむべき

惜しむは君が名のみとよ。

三十八 復 讐

それは木の芽この中にある或ホテルの露台ろだいだった。彼はそこに画を描きながら、一人の少年を遊ばせていた。七年前まえに絶縁した狂人の娘の一人息子と。

狂人の娘は巻煙草に火をつけ、彼等の遊ぶのを眺めて

いた。彼は重苦しい心もちの中に汽車や飛行機を描きつづけた。少年は幸いにも彼の子ではなかった。が、彼を「おじさん」と呼ぶのは彼には何よりも苦しかった。

少年のどこかへ行った後、のち狂人の娘は巻煙草を吸いながら、媚こびるように彼に話しかけた。

「あの子はあなたに似ていやしない？」

「似ていません。第一……」

「だって胎たい教きょうと云うこともあるでしょう。」

彼は黙って目を反らした。が、彼の心の底にはこう云う彼女を絞め殺したい、残酷な欲望さえない訣ではなか

った。
……

三十九 鏡

彼は或カツフエの隅に彼の友だちと話していた。彼の友だちは焼林檎やきりんごを食なかい、この頃の寒さの話などをした。彼はこう云う話の中に急に矛盾むじゆんを感じ出した。

「君はまだ独身だったね。」

「いや、もう来月結婚する。」

彼は思わず黙ってしまった。カツフエの壁に嵌はめこん

だ鏡は無数の彼自身を映うつしていた。冷えびえと、何か脅おびやかすように。……

四十 問 答

なぜお前は現代の社会制度を攻撃するか？

資本主義の生んだ悪を見ているから。

悪を？ おれはお前は善悪の差を認めていないと思っ
ていた。ではお前の生活は？

——彼はこう天使と問答した。尤もつとも誰にも恥はずる所

のないシルクハットをかぶった天使と。……

四十一 病

彼は不眠症ふみんしょうに襲われ出した。のみならず体力も衰えはじめた。何人かの医者いさなかたは彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。——胃酸過多いさんかた、胃アトニー、乾性肋膜炎かんせいりくまくえん、神経衰弱、慢性結膜炎まんせい、脳疲労、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知していた。それは彼自身を恥じると共に彼等を恐れる心もちだった。彼等を、

——彼の軽蔑していた社会を！

或雪曇りに曇った午後、彼は或カツフエの隅に火のついた葉巻を啣くわえたまま、向うの蓄音機から流れて来る音楽に耳を傾けていた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音楽だった。彼はその音楽の了るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄ってレコオドの貼り札を検べることにした。

Magic Flute —— Mozart

彼は咄嗟とっさに了解した。十戒を破ったモツツアルトはやはり苦しんだのに違いなかった。しかしよもや彼のよう
に、……彼は頭かしらを垂れたまま、静かに彼の卓子テエブルへ帰っ

て行つた。

四十二 神々の笑い声

三十五歳の彼は春の日の当つた松林の中を歩いてい
た。二三年前に彼自身まえの書いた「神々は不幸にも我々の
ように自殺出来ない」と云う言葉を思い出しながら……

四十三 夜

夜はもう一度迫り出した。荒れ模様の海は薄明りの中に絶えず水沫しぶきを打ち上げていた。彼はこう云う空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歡びだった。が、同時に又苦しみだった。三人の子は彼等と一しよに沖の稻妻いなづまを眺めていた。彼の妻は一人の子を抱きいだ、涙をこらえているらしかった。

「あすここに船が一つ見えるね？」

「ええ。」

「ほぼし檣しらの二つに折れた船が。」

四十四 死

彼はひとり寝ているのを幸い、まどごうし窓格子に帯をかけて
いし縊死しようとした。が、帯に頸を入れて見ると、俄かに
 死を恐れ出した。それは何も死ぬせつな刹那の苦しみの為に恐
 れたのではなかった。彼は二度目には懐中時計を持ち、

試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかつた後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさえすれば、死にはいつてしまふのに違いなかつた。彼は時計の針を調べ、彼の苦しみを感じたのは一分二十何秒かだったのを発見した。窓格子の外はまっ暗だった。しかしその暗の中に荒あらしい鶏の声もしていた。

四十五 Divan

Divan はもう一度彼の心に新しい力を与えようとし

た。それは彼の知らずにいた「東洋的なゲエテ」だった。彼はあらゆる善悪の彼岸ひがんに悠々と立っているゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人クリストよりも偉大だった。この詩人の心にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇さえ花をひらいていた。若しこの詩人の足あとを辿たどる多少の力を持っていたらば、——彼はデイヴァンを読み了り、恐しい感動の静まった後のち、しみじみ生活的宦官に生まれた彼自身を軽蔑せずにはいられなかった。

四十六 謔

彼の姉の夫の自殺は俄かに彼を打ちのめした。彼は今度は姉の一家いっかの面倒も見なければならなかった。彼の将来は少くとも彼には日の暮のように薄暗かった。彼は彼の精神的破産に冷笑に近いものを感じながら、（彼の悪徳や弱点は一つ残らず彼にはわかっていた。）不相変ざんげろくいろいろの本を読みつづけた。しかしルツソオの懺悔録ざんげろくさえ英雄的な謔に充ち満ちていた。殊に「新生」に至って

は、——彼は「新生」の主人公ほど老獪ろうかいな偽善者に出会ったことはなかった。が、フランソア・ヴィヨンだけは彼の心にしみ透った。彼は何篇かの詩の中に「美しい牡おす」を発見した。

絞罪を待っているヴィヨンの姿は彼の夢の中にも現れたりした。彼は何度もヴィヨンのように人生のどん底に落ちようとした。が、彼の境遇や肉体的エネルギーはこう云うことを許す訣はなかった。彼はだんだん衰えて行った。丁度昔スウィフトの見た、木末こずえから枯れて来る立ち木のように。……

四十七 火あそび

彼女はかがやかしい顔をしていた。それは丁度朝日の光の薄氷うすらいにさしているようだった。彼は彼女に好意を持っていた。しかし恋愛は感じていなかった。のみならず彼女の体には指一つ触らずにいたのだった。

「死にたがっていらつしやるのですってね。」

「ええ。——いえ、死にたがっているよりも生きること
に飽きているのです。」

彼等はこちら云う問答から一しよに死ぬことを約束した。

「プラトニツク・スウイサイドですね。」

「ダブル・プラトニツク・スウイサイド。」

彼は彼自身の落ち着いているのを不思議に思わずには
いられなかった。

四十八 死

彼は彼女とは死ななかつた。唯未だに彼女の体に指一

つ触っていないことは彼には何か満足だった。彼女は何ごともしなかつたように時々彼と話したりした。のみならず彼に彼女の持っていた青酸加里せいさんかりを一罎渡し、「これさえあればお互に力強いでしょう」とも言ったりした。

それは実際彼の心を丈夫にしたのに違ひなかつた。彼はひとり籐椅子とういすに坐り、椎しいの若葉を眺めながら、度々死の彼に与える平和を考えずにはいられなかつた。

四十九 剥製の白鳥

彼は最後の力を尽し、彼の自叙伝を書いて見ようとした。が、それは彼自身には存外容易に出来なかった。それは彼の自尊心や懐疑主義や利害の打算の未だに残っている為だった。彼はこう云う彼自身を軽蔑せずにはいられなかった。しかし又一面には「誰でも一皮剥いて見れば同じことだ」とも思わずにはいられなかった。「詩と真実と」と云う本の名前は彼にはあらゆる自叙伝の名前

のようにも考えられ勝ちだった。のみならず文芸上の作品に必しも誰も動かされないのは彼にははつきりわかっていた。彼の作品の訴えるものは彼に近い生涯を送った彼に近い人々の外にある筈はない。——こう云う気も彼には働いていた。彼はその為に手短かに彼の「詩と真実と」を書いて見ることにした。

彼は「或阿呆あほうの一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剥製はくせいの白鳥はくちようのあるのを見つけた。それは頸くびを挙げて立っていたものの、黄ばんだ羽根さえ虫に食われていた。彼は彼の一生を思い、涙や冷笑のこみ上げるの

を感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった。彼は日の暮の往来をたった一人歩きながら徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。

五十 俘

彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じていた。それは彼にはこの友だちの孤独の、——軽快な仮面の下にある孤独の人一倍身にしみてわかる為だった。彼はこの友だちの発狂した後、^{のち}二三

度この友だちを訪問した。

「君や僕は悪鬼あくきにつかれていますんだね。世紀末の悪鬼と云うやつにねえ。」

この友だちは声をひそめながら、こんなことを彼に話したりしたが、それから二三日ご後には或温泉宿へ出かける途中、薔薇の花さえ食っていたと云うことだった。彼はこの友だちの入院した後のち、いつか彼のこの友だちに贈ったテラコッタの半身像を思い出した。それはこの友だちの愛した「検察官」の作者の半身像だった。彼はゴオリイも狂死したのを思い、何か彼等を支配している力

を感じずにはいられなかった。

彼はすっかり疲れ切った揚句、あげくふとラディゲの臨終の言葉を読み、もう一度神々の笑い声を感じた。それは「神の兵卒たちは己おれをつかまえに来る」と云う言葉だった。

彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘おうとした。しかしどう云う闘いも肉体的に彼には不可能だった。「世紀末の悪鬼」は実際彼を虐さいなんでいるのに違いなかった。彼は神を力にした中世紀の人々に羨しさを感じた。しかし神を信ずることは——神の愛を信ずることは到底とうてい彼には出来なかった。あのコクトオさえ信じた神を！

五十一 敗北

彼はペンを執^とる手も震え出した。のみならず涎^{よだれ}さえ流れ出した。彼の頭は○・八のヴェロナアルを用いて覚めた後^{のち}の外は一度もはっきりしたことはなかった。しかもはっきりしているのはやつと半時間か一時間だった。彼は唯薄暗い中^{なか}にその日暮らしの生活をしていた。言わば刃^はのこぼれてしまった、細い剣を杖にしながら。

(昭和二年六月「遺稿」)

日本文学電子図書館

「或阿呆の一生・齒車」

著 者：芥川龍之介

制作者：宮澤一郎

出版社：角川文庫、角川書店

昭和41年4月30日 17版発行



日本文学電子図書館